

## 「古典」の形成という視点から見た沖縄近代

沖縄県立藝術大学 喜屋武 盛也

文学、美術、音楽などの芸術作品において規範となり理想とされる「古典」の存在は、各時代や地域の芸術思想を規定するばかりでなく、作品創造や教育の現場、さらに広く一般の人々の常識に至るまで強い影響を与える。新たに生み出される作品に対して評価基準となる軸を規定し、また学習の対象とされるような模範的で優れた作品がどのようなものであるのかということは、それに反発するにせよ従うにせよ、ある地域や時代における文化のありかたを左右する、極めて重要な問題と見なし得る。

加えて、「古典」の在りかたを問うことは近代的な問題であり、かつ現代的な問いでもある。西洋においては、おそらく多くの断絶や復興を繰り返しつつも、長らくギリシャ・ローマの古典古代の文物が真正なる古典であり続け、新旧論争的構図において、離反と結合の相対立するベクトルの複雑な組み合わせのなかで近代および近代人の自覚が形成されたといえよう。視線を例えば日本に移しても、近代を迎える構図の相違、地理的歴史的なコンテクストの相違こそあれ、おそらく同様の事柄が姿を現すことだろう。総じて、近代ナショナリズムの隆盛を背景に、自国人・自言語の産物のうちにも「古典的」なものを見出す動きが世界的に確認される一方で、近代はそうした規範性そのものからの脱却を図る動きをもとより内包しており、そうした動きの帰結として、極めて現代的でフラットな構造が出現する。「古典」は、近代化、さらにはグローバル化の現代におけるアイデンティティ上の不安のなかで、今度は自文化の伝統の連続性を確認するための足場を支える役割を期待されるようになるかもしれない。

本発表はこうした問題を近代沖縄(もしくは琉球)の文化形成において考察するための端緒を開こうとするものである。「古典」の形成や機能についての研究一般に一事例を提供すると同時に、従来の沖縄芸術文化研究を新たな視点から整理することを視野に入れたい。本格的な考察を展開するためには各ジャンル内部の言説や教育制度の変遷を個別に地道に追ってゆく必要があるだろうが、まずは伊波普猷をはじめとした沖縄文化論の主導者と目される知識人たちの言説を介してアプローチすることにした。沖縄の伝統文化は一方では民俗文化として、それこそ文化人類学的な視点で民衆の生活誌から眺められたが、他方では、王国に栄えた宮廷文化としての側面も少なからず存在する。近代沖縄の知識人たちは、そうした古の宮廷文化を「古典」と見定め、それとの断絶を何らかの形で克服して近代の政治的文化的激動のなかで新しい沖縄文化を組み立てるための軸ないし指針を得ようと模索したのである。